

何か杖の様なものを振り上げて、虎を打ち殺すといふ身構ひで、そつと障に沿つて正面へ顯はれて来る、すると片側に在る乙は、和藤内のおつ母さんの積りで、杖をついて、よつちと歩いて来る、そして、互に正面の障の端の處まで来て、バツタリ出遭ふと、和藤内は負になる。

今度は甲が虎になつて、のそり／＼と這ひ出てくる、そして、乙が、和藤内になつて、刀を振り上げてやつて来てバツタリ出合ふと、今度は虎が負けになる。

次に、甲は、おつ母さんになつて、乙は虎になつて出て来ると、おつ母さんが負ける。

この様に、三度續けて負けた所で、一勝負決るといふことになるのですが、この遊で、必要なことは、障子の陰に居る時に、對手は、今度何になる

十八
であらうかといふことを考へて出ること、對手は屹度おつ母さんになつて出るなと思つた時は、自分は虎になつて出て行くといふ風にするのです、試みにやつて御覽なさい、中々、面白いです。

勇ましい少女 (つゞき)

太田 龍東

それで、菊枝は玄關先の隅に刀を抜いて、今か今かと出て来るのを待つて居りますと、一人遣つて参りました。まさか自分を斬るやうな者が、待伏せしてゐやうとは思ひませないので、大きな柳行李を擔いで、重そうに暗い所を足探りしながら、酒の酔ひで上機嫌となり、獨り言を云つてゐます。「この行李は何が中にあるか知らねーが、馬鹿に重いや、ゲン、ドッコイ／＼氣を附けねーと危

險いぞ。こゝらに何でも階段があつたけな。』
 この獨言を言ふのが、菊枝に取つては大
 そうな便宜でありま
 す。もし無言つて通つ
 てしまへば、暗くて知
 れにくいのであります。
 菊枝はその言葉を使い
 に、足音のせぬやうに
 側により、腰の邊りと
 思ふ所を、腕一ぱいに
 力を込めて、岩をも通
 れと斬りつけました。
 盜賊は、不意に腰を斬



られましたので、行李を
 前に投げ出し、その儘そ
 こに「キヤツ」と叫んで倒
 れました。
 菊枝は、案外無造作に
 參つたのを喜びまして、
 尙ほも續いて斬らうと思
 ひましたが、何分眞闇で
 少しも解りませんので、
 そのまゝ様子考へてゐ
 ますと、盜賊は、餘程深
 く斬られたと見へ、倒れ
 たまゝ起き上らないで、
 「ウーン、ウーン」と苦叫
 てるます。

すると又一人の盜賊が、こゝへ遣つて來ました。

この盜賊は大きな風呂敷包に、品物を一ぱい入れて、

之れを背負つて玄關前まで來ますと、「ウーン、

ウーン」と云ふ聲が聞へますから、

『オヤ、こんな所に「ウーン、ウーンツ」つて、

何してゐるのだ。』

とその側に寄つて見ましても、返事もしないで、

只「ウーン、ウーン」ばかり云つてゐますから。

『手前何んだな、酒に酔ばらつて倒れたんだね。

ハハハア、そんな意氣地の無ことで、盜賊が出來ると思つてるのか。オイ早く起きねーかよ。』

いくら云つても、返事もしなければ起きもしませんから、探り探り近寄つて起さうとする所を、

先程から狙をすましてゐた菊枝は、靜かにその前

へ廻つて、脚と思ふ所を横に斬り附けますと、盜

賊は向ふ脛を斬られて、バツタリ倒れてしまいま

した。

菊枝は荒男を二人までも、難なく斬り附けまし

て、自分ながらも其案外な働きに感心します。そ

の今迄の働きに、身体は疲れてしまい、重ねて斬

る勇氣はなくなりまして、その場に腰を下して息

をつきました。

向ふ脛を斬られた盜賊は、先きの盜賊のやうに、

腰を深く斬られたのとは違ひ、命に別條のあるや

うな傷ではありませんから、聲を出すには少しも

差支ありません、それですから、斬られるとすぐ

に、大きな泣き聲を出して、

『オーイ、助けて呉れツ、盜賊だ、人殺し、人殺しッ。』

なんて、自分が盜賊でありながら、人の事を盜賊

呼はりしてゐます。

菊枝は、又氣を確つかりと持直し、その盜賊の側に寄りまして、

『盜賊さん、お前を斬つたのは妾だよ、この家の娘の菊枝ですよ。』

と云ひますると、之れを聞いた盜賊は驚いて

『な、なに己れを斬つたのは、この家の、あのこの家の娘だへ、よくもこんな酷い目に逢せよつた、わア痛たゝ、をのれッ。』

と云ひながら、菊枝に手向ふといたします。

そこで菊枝は、

『よくもそんな事が云へるね、自分の方から先きに酷い事を謀反でいながら、悪るいことをすれば悪い報いが来るのは正當ぢやないか、それは天罰だから仕方がないよ、恚爲死ぬなら妾の手に掛つ

てれ死によ。』

と云つて、刀を持換へ、今や一討にせうとする途端、後から菊枝をグイと抱へて、兩腕の動けない程、強く挫めたものがあります。

皆さんこれは、何者でせう、云はずと知れるでありません、残つてゐた一人の盜賊であります。

先程から大きな聲で「人殺し人殺し」と叫びましたから、この盜賊が、このことを知つて、菊枝を

後から抱へたのであります。抱へられた菊枝は、少しも動くことが出来なくなつて、全く自由を失つてしまいました。那麼もその筈で、大きな男が

力任せに、引き挫めたのでありますから、いくら勇ましいと云つても、僅か十六の少女でありますから、身動きも出来ないのは、無理もありません。

愆うなれば、菊枝は最早殺されるより仕方はありません。愆爲殺される覺悟で蒐つたとは申しまして、考へて見れば殘念ではありませんか、難なく二人まで斬り附けて、今一人の事になつてから生捕にされたのでありますもの。と云つた所で、愆うなればもう駄目でありますから、菊枝も諦らめて、殺される覺悟になりました。すると盜賊は

『甚麼な奴が来たかと思や、この家の娘ぢやねーか、よくも己れの兄弟を二人まで遣つ付けよつた、尼つ女、兄弟分の仇た覺悟しろッ。』

といかにも悪々しげに申します。

『妾は二人まで殺したから、もう諦らめて死ぬよ。

さあ早くお殺し。』

と少しも恐れる色なく、判然と申しますと、盜賊

は、

『よくも覺悟した、さあ命は己れが貰つたぞ。』

と云ひながら、左手に菊枝を抱へ、右の手に刀を持ちまして、喉笛見かけてグザと刺し通さうとしました。

この時恰度、父の良正は歸つて參りました。この様子を見ると、すぐ飛び蒐つて、エイと一聲叫んだと思ふと、盜賊は筋斗打つて大地にドシンと投げ飛ばされました、起き上らうとする所を、良正は刀の折れるほど眉間を斬り附けました。それでその盜賊は、頭を二つに破られて死んでしまいました。

先きに向ふ脛を菊枝に斬られた盜賊は、尙ほも「人殺し、人殺し」と大きな聲で叫んでゐます。良正は之れを見るや「己れ」と云ひさま一刀の

本に斬り伏せてしまいました。

話しが少しく變つて参りますが、父良正の事を一寸述べませう。良正は、お巡りさんに連れられて四五丁行きますと、お巡りさんは

『私は用事があつて、少しく他へ廻つて行くからお前は一足先きに警察署へ行つて下さい。』

と云つて、何所かへ行つてしまいました。それで良正は變だとは思ひましたが、一人で警察署へ参りますと、什麼でせう、警察署では呼び出した覚えはないと申します。實に馬鹿げてゐますが、仕方がありませんから、歸つて参りました。

道々考へて見ますと、先きのお巡りさんは嘘のお巡りさんで、私を呼び出してゐいて、後で何か悪いことでもするのであるまいかと思はれません。恚う考へると、宅のことが心配でなりません

から、急いで飛んで歸つて見ますと、いまの有様であつたのであります。

良正が、盜賊を斬つた時には、菊枝は氣絶して側に倒れてゐました。そこで良正は菊枝の身体に傷でもないかと、よく見ましてもありませんから、安心して氣附薬を吞ませますと、菊枝は息を吹き返して來ました。

良正は喜びまして

『オ、菊枝死なないで居ましたか、わアこんな嬉しいことはない、氣を確かり持て、お父さんが歸つたからもう大丈夫、盜賊は皆殺してやりました、して妹の重遇は何處した。』

と尋ねますと、菊枝はお父さんの顔を見て、餘りの喜しさで返事も出來ず、『お父さん』と一言云つたばかりで、父を抱へて喜し泣きに泣いてゐます。

父は、菊枝の命のあるのを見て、一安心はしませんが、重酒の姿が見へませんから、それが氣に蒐つて堪りません。

『菊枝 妹は何をした、重酒は何所にゐるか、コリヤ菊枝、重酒は何をしました。』
と急ぎ立て、聞きますと、菊枝は漸く口を開きま

して、
『妹は、押入の中に隠しておきました。』
と一つ息で答へました。

『オー、不錯か、重酒は押入の中か、』
と云ひまして、菊枝の手を引いて行つて、押入を開けて見ますと、重酒は中に小さくなつて震へてゐます。父は之れを見て、急いで抱き上げ。

『爾も無事でゐて呉れたか、わア有り難い、こんな嬉しいことがあらふか。』

と三人が喜んで、しばらくは無言で、顔見合せるばかりでありました。

皆さん、三人が今の喜びを考へて御覽なさい。
こんな喜ばしい悦れしいことが、亦とないだらふと思ひます。とてもこの有様は、私のやうな筆では書き表はすことが出来ませんから、こゝには書かないで、皆さむのお考へに任かしておきます。

しばらくしてから、父は菊枝に今夜の出来事の様子を聞きますと、菊枝は一什始終を話しました。父は菊枝の動きを聞きまして大に感心いたし、
『よくもそんなに勇ましい動きをしました、爾の今夜の働きは、とても男でも及びません。よく遣つて呉れました。』

と云つて賞め、扇を舉げて躍つて悦びました。

このことが世の中に知れて、いかなロシヤの新

聞でも、大さう賞めて出しました。四五日たつと、ウラジホストツクで一番金持の人が、菊枝を子に呉れと云つて参りましたが、良正は遣らないで、ますく之れを可愛つて育てました。

その後、日露戦争が初まつた時、この三人は、日本へ歸つて來たと云ふことであります。

(おしまひ)



お寺でらのぶつだんに、そなへておいたおちんが、いつのまにか、なくなつていたので、おしーさんは、このかなほとけがくつたのだろーといつて、いしだんへ、なげつけたらくわんくといひましたと